

看護学科における解剖遺体見学実習の意義

—実習後の感想文の分析から—

古屋敷明美*¹ 田村 典子*¹ 石野レイ子*¹ 土谷 美恵*¹
塩川 華子*¹ 大谷五十鈴*¹ 沖田 一彦*² 宮口 英樹*³
堂本 時夫*¹

*1 広島県立保健福祉短期大学看護学科

*2 広島県立保健福祉短期大学理学療法学科

*3 広島県立保健福祉短期大学作業療法学科

抄 録

社会的に看護の質の向上が求められ、看護学の基礎となる解剖学教育の再構築が試みられていることから、解剖遺体見学実習のもつ意義と今後の課題を検討する目的で実習後の学生の感想文の分析を試みた。看護学科学生の特徴を知るために、理学/作業療法学科学生の感想文との比較も行った。これらの分析をもとに、今後解剖遺体見学実習をどのように看護教育のなかに生かしていくかについて考察した。学生は心情の変化を伴いながらも解剖学的な学びを確実なものにすると同時に多くの哲学的な学びをしていた。また、看護学科の学生は生命を司る臓器の記載が多く、個体差、性差、年齢差、生活の歴史の現れ、疾患による変化など、臓器の外観や人体を全体から生活体として見る「看護の視点」からの学びの記載が特徴であった。今後、解剖学的知識を活用した教科内容の検討、および学生の心情を支援した意図的なオリエンテーションの検討が課題と考える。

キーワード：解剖遺体見学実習、感想文、学生の心情の変化、看護の視点

緒言

現在、我が国では医学・医療の急速な進歩、急増する高齢者、保健医療を取り巻く社会環境や経済的変化に伴い、ヘルスケアシステムの変革が要求されている。また、看護に対する人々のニーズは複雑化し、かつ多様化している。この大きなうねりの中で看護系大学の設置が進められると同時に看護学の学問としての体系化の動きがある。

看護教育では、看護の対象を“生から死”までの発達過程における生活者として捉えている。看護職には対象を「看護の視点」から観察して情報を集め判断・評価できる独自の能力、および対象のクオリティ・オブ・ライフの向上をめざし他職種と協同した実践ができる基礎的能力の教育が期待されている。すなわち、臨床における判断能力の向上と看護の質的向上が図られている。

菱沼¹⁾や薄井²⁾は看護職自らが看護にとっての解剖学・生理学の意味を問い、看護学を学ぶ上での解剖生理学を再構築する必要があることを提言している。看護系大学においては、ここ数年見学実習とは異なる様々な人体解剖実習の取り組みもなされつつある^{3,4,5)}。また、大谷⁶⁾と小林⁷⁾は医学生の人体解剖実習の感想文から「人体解剖実習は単に解剖学的な理解だけでなく、生命や死について哲学的な学習の場となっており、医学への導入の実習として定着している」と述べている。同様な理解は医療技術者養成課程でも広がりつつあると紹介している。一方、外崎らの調査⁸⁾によれば、医療技術者養成機関においては解剖実習の実施は、作業療法士100%、理学療法士98.2%、看護婦(士)55.0%であり、その実習内容は解剖遺体の見学が74.2%であった。看護系大学における人体解剖実習については今本らの調査⁹⁾があり、大学18校中12校、3年制看護系短期大学では32校中16校が実施していると報告している。

本学では、開学以来、H大学医学部医学科解剖学第一講座の協力を得て看護学科と理学療法学科および作業療法学科の学生に対して解剖遺体見学実習を行ってきた。初年度の実習後には、デス・エデュケーションの立場からアンケート調査とその分析¹⁰⁾を行った。

そこで今回、看護教育のなかで解剖遺体見学実習のもつ意義と今後の課題を検討する目的で実習後の学生の感想文の分析を試みた。看護学科の学生の学びの特徴を知るために、同時に理学/作業療法学科学生の感想文との比較も行った。これらの分析をもとに、今後解剖遺体見学実習をどのように看護教育に生かしていくかについて考察した。

解剖遺体見学実習の概略

本学における解剖遺体見学実習は、看護学科と理学/作業療法学科の3学科が1年次の後期に、H大学医学部医学科の学生が行っている解剖実習進行に合わせて行っている。カリキュラム上での解剖遺体見学実習の位置づけについては、以下の通りである。

看護学科1年生：カリキュラムでは、前期60時間の「解剖学」講義を設定し、解剖学についての実習時間は組んでいない。見学実習時には、講義と試験が終了した時点で補習として時間割を調整し、解剖遺体見学実習を4時間実施している。

目的として次の2点を設定している。1) 講義で学んだ知識をもとに、医学部で実施されている解剖実習の遺体を観察し、人体の構造をより深く理解する。2) 遺体に接し、生命と死、献体の意義などを考え、医学領域に携わる者としての知識と意識を深める。

見学時期は、1年次の11月、胸腔と腹腔の臓器摘出前の状態を観察できる時期で、見学には本学解剖学教授の他、H大学医学部医学科解剖学第一講座教授および看護学科の教員が4~5人で関わる。実習に先立ち学生は本学教授から、見学実習の目的・目標、注意事項として献体の制度と実習に臨む態度などのオリエンテーションを受ける。実習当日には医学部教授より献体者ご遺族の手記が披露され実習に臨む。その時学生は実習前後には黙祷し、終了後には各自が持ち寄った白菊を慰霊塔に捧げ、感謝と慰霊とを行っている。

理学/作業療法学科1年生：両学科の学生については、講義も実習も合同で計60人で進めている。カリキュラムでは、前期45時間、後期30時間の「解剖学」講義と後期90時間の「解剖学」の実習が組まれている。学内実習で骨模型を用いた実習とニホンザルの解剖を含めた肉眼解剖実習を終えている。講義は、骨、筋肉、神経の部分がほぼ終了し、運動学I・IIが入り、生体の運動、解剖学的構造と機能の学習をしている。見学時期は1年次の後期で、実習時間を利用して行っている。解剖遺体は既に四肢が外されている状態である。

研究対象および方法

1. 対象

本学看護学科1996年度~1998年度1年生、295名と、理学/作業療法学科1996年度~1998年度1年生、185名を対象とした。

2. 研究方法

実習終了後2週間以内に400字詰原稿用紙1枚に内容の制限をつけずに自由記載の感想文を書かせた。感想文は、レポートやアンケート調査のように課題が指

示されないために、自分の学習状況や成果、自分の意見や感情を報告できると考えた。また、自由記載は、自分の学びや思いを素直に表現できるので、学生の本音であるニードや学習内容が捉えやすいのではないかと考えた。

分析は、KJ法¹¹⁾により抽出した文章の記載を次の9つにカテゴリー化した。カテゴリーは、1) 解剖学的成果、2) 事前の不安、緊張、期待、3) 見学への自覚、4) 献体への感謝、5) 生と死を考える、6) 自身への戸惑い、7) 心理的嫌悪感、8) 医療人への自覚、9) 勉学への自覚についてである。

次に、理学/作業療法学科学生の感想文と比較して、看護学科の特徴と考えられる「看護の視点」からの学びと「学生の心情の変化」について記載の具体的内容から分析を加えた。「看護の視点」とは、「生命力の消耗を最小にするよう生活をとのえる」という看護の目的を持って看護であるものを見極めることを言う。対象を生活体として捉えるという看護の視点から見る立場には、個別性、年齢、性、生活過程、健康障害などの視座がある。

分析には、看護学科と他学科との比較には χ^2 検定を行い、 $P < 0.01$ 以上を有意差有りとした。解剖学教授と看護学科の教員との一致率は90.0%である。

結 果

1. 看護学科の学習内容の分析

看護学科の学生295名の感想文について、前記の9つのカテゴリーについての記述の有無について検討した。その結果は表1に示す。記述内容の多いカテゴリーの順に、パーセント（記述した学生数/全体数）を示すと次のようである。『解剖学的成果』88%、『献体への感謝』69%、『事前の不安、緊張、期待』33%、『勉学への自覚』30%、『生と死とを考える』29%、『見学への自覚』28%、『医療人の自覚』23%、『自身への戸惑い』7%、『心理的嫌悪感』6%。

各カテゴリーの具体的な記載内容は次のように整理される。

1) 解剖学的成果の具体的な記載内容

学生自身がつかんだ学習内容としては学生の観察手法とそれに基づく感想を大別すると次の①から④のようであった。

①目で見ると、手で触ることによる学習内容は以下のような記載があげられる。「静脈から心臓をのぞき込んで見ると弁があり房室がちゃんと区切っていた」、「心臓の位置と方向」、「大動脈は指が2本入るくらい太くて厚いのに驚いた」、「命を守っていると感動した」、「肺は大きく切れ目が深い」、「左が2葉・右が3葉を確認」、「肺はスポンジのようにフワフワしていて壊れそう」、「押すと肺胞の膨らみが戻り感動した」、「肋骨は薄っぺらで折れやすい」、「子宮・卵巣は思ったより小さい」、「十二指腸から直腸まで辿って名称を確認した」、「長いによくおさまっていると感心した」、「小腸・大腸が腸間膜で後腹壁に繋ぎ止められていてズレ落ちないようにしている」、「腹腔は深く、内臓の位置関係や繋がりがわかりやすい」、「脾臓を見つけた時は感動した」、「残念ながら背側にある膵臓・腎臓は見られなかった」。このような感覚を通じての理解と立体的な仕組みや位置関係の学習は解剖学的知識をより確実なものにし、三次元的な人体構造理解を容易にしていた。

②教科書と比較した学習内容として整理されるものは、次のような記載があげられる。「胸骨を取ると教科書の図の通り臓器があった」、「教科書で分かりにくい構造がわかった」、「教科書と照らし合わせた」、「教科書の平面上では想像しにくい映像が思い描ける」、「自分が間違っていて覚えていたところを発見した」などである。

③触感や重量を比べることによる学習内容としては、「肝臓は中身が密で重いが肺はスポンジのような触感」、「肺は右が重い」、「胸膜と心膜の壁の厚さは違う」、「動脈は厚く弾力があるのに比べ静脈は薄く弾力もない」、「心臓を他の人と比較してみる」などがあった。

④意図的に動かしてみることによる学習内容としては、「上肢の橈骨神経・尺骨神経、正中神経を引っ張ってどの腱や筋肉が使われているかわかった」、「肘関節の腱を動かしてどこの腱や筋肉が使われているかわかった」などである。

一方、学生が着目している臓器としては、心臓・血

表1 看護学科学生の感想文に記載があった9つのカテゴリー

年 度	カテゴリー	1解剖学的成果	2事前の不安	3見学への自覚	4献体への感謝	5生と死を考える	6自身への戸惑い	7心理的嫌悪感	8医療人の自覚	9勉学への自覚
1998年度生(102)名		97	38	33	75	34	2	10	20	30
1997年度生(100)名		82	34	31	65	25	15	4	24	40
1996年度生(93)名		81	25	20	63	27	5	3	24	18
合 計	295名	260	97	84	203	86	22	17	68	88

管系、肺など「生命を司る臓器」が多く50%を占めていた。次いで消化器系(35%)、子宮・卵巣・胎児標本(35%)、神経・骨・筋肉(25%)であった。また、解剖学的用語の使用については、正しい用語の記載が少ない。「人体、臓器」しか使用しない学生が10%、解剖学用語の記載が1語もない学生が23%で、両者を合わせると全体の3分の1が正確な解剖学用語を使用していなかった。

2) 看護学科学生に多く見られた記載内容

臓器の外観や人体を全体から生活体として人間を捉えた「看護の視点」と考えられる記載が38%の学生に見られた。具体的な記載内容は4つの「視座」に整理された。それを表2に示す。そのパーセント(記載が見られた学生数/全体数)は、「個体差」20%、「生活の歴史が現れている」15%、「疾患による臓器の変化」14%、「性差や年齢差」9%である。これらの記載は学生がこれまでに学習してきた看護の知識を活用した人体の見方、即ち「看護の視点」からの見方を行っていると考えられた。

表2 解剖学的成果の具体的な記載内容

視座	具体的な記載内容
個体差	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人外観が異なるように、臓器の大きさや重さ、形、位置が異なる 一人一人、大きさも形も違っていた 全く一緒の人はいない・臓器の個性を発見した
生活の歴史の現れ	<ul style="list-style-type: none"> 喫煙者と非喫煙者とは肺の色が違っていた タバコを吸う人の肺は真っ黒 脂肪の黄色、脂肪の量は人によって違う 一人一人異なり、その人の生活の様子を映し出しているようだ 今まで生きてきた証のようだ
疾患による変化	<ul style="list-style-type: none"> 肺に斑点状あり肺ガンであった 左が重く先生に聞くと肺腫瘍であった 腹壁には白いブツブツあり癌の転移であった 肝硬変によって表面がザラザラしていた 肝硬変で凹凸があった、人より2倍大きい
性差・年齢差	<ul style="list-style-type: none"> 男性の臓器は女性より大きい 女性は腸管に黄色い脂肪が付いていた 90歳の女性は胃、子宮がとても小さい 年齢により臓器の大きさに随分差があった

3) 解剖学的成果以外のカテゴリーの具体的な記載内容

『献体への感謝』に入る記載としては、「医学の発展を願い献体された気持ちへの感謝は忘れない」、「ご本人やご家族の意志や気持ちに感謝」、「献体された方に敬意を表す」、「好意にとっても感謝」、「心から感謝・お礼の気持ち」、「献体について考えた」などの記載があった。

『生と死を考える』と『医療人の自覚』に入る記載としては、「人体内部で様々な臓器が絶え間なく動いていると実感」、「人の命の重み、尊さを学んだ」、「生命

の神秘さ・不思議さを感じた」、「人体のすごさ・感動」を述べている。また「ご遺体やご家族の意志や期待に添いたい・応えたい」、「今まで医療従事者になることに不安があったが頑張りたい」、「医療従事者の責任・自覚を感じた」、「期待に添えるよう頑張りたい」などの記載があった。

『勉学への自覚』に入る記載としては、「貴重な学習体験となり、この学習経験を無駄にはいけない」、「貴重な体験をありがとうございました、とても良い経験になりました、忘れないで学習に励みたい」などの記載が殆どであった。

『事前の不安』と『嫌悪感』に入る記載としては、学生的心情では、実習前に「恐れ・怖い」19%、「不安」15%、「緊張」13%、その他「逃げ出したい」、「ドキドキしていた」、「抵抗を感じていた」など23%の記載をしていた。「実習がたのしみ」、「期待している」は3%の記載で少ない。また、当日実習室に入った直後に嫌悪感を抱く学生も多く「ホルマリンの臭いがきつい」、「ご遺体を見た時はショックを受け足がすくんだ」、「涙が出た」、「口がきけなかった」、「怖さを感じた」など34%の記載があった。解剖遺体見学実習による心情の不安を記載している学生は事前と当日とを合わせると3分の2を占めていた。しかし、その後時間経過と共に心情が変化したことを記載している学生が多くいた。その内容としては「オリエンテーションで教授や教官が紹介された献体されたご本人やご家族の気持ちや意志に込めたい」、「一生懸命見させて貰おう」、「せつかくの機会を無駄にはいけない」、「恐怖や不安を持っていることが恥ずかしくなった」、「緊張や恐怖はいつの間にか無くなっていた」、「時間がアツという間に過ぎた」などであった。また、「もっと見たい」、「詳しく見たいと夢中になった」という知的好奇心に変化している学生は心情を記載している学生の3分の2を占めていた。但し、心情の記載がない学生については変化があったかどうかはわからない。

2. 他学科の学習内容からの分析

理学療法学科学生92名と作業療法学科学生93名の感想文を、同じように分析した結果は表3に示した。理学/作業療法学科学生に共通して記載が多いのは、『解剖学的成果』、『献体への感謝』、次に『事前の不安、緊張、期待』、『勉学への自覚』である。作業療法学科では『見学への自覚』の記載が目立つ。

次に、記載している具体的な記載内容で、理学/作業療法学科の両学科に共通していたのは、神経・腱・筋肉・血管・骨の記載が殆どであること、正確な解剖学的用語を用いて筋肉や腱の起始部・停止部と位置関係、その機能に関する記載であった。理学療法学科の特徴としては、運動に関心を持ち、神経、筋肉、腱、

表3 理学／作業療法学科学生の感想文に記載があった9つのカテゴリー

年度	カテゴリー	1 解剖学的成果	2 事前の不安	3 見学への自覚	4 献体への感謝	5 生と死を考へる	6 自身への戸惑い	7 心理的嫌悪感	8 医療人の自覚	9 勉学への自覚
理学療法学科 (92) 名		82	29	21	77	22	1	0	25	28
作業療法学科 (93) 名		76	35	43	82	21	5	14	25	31

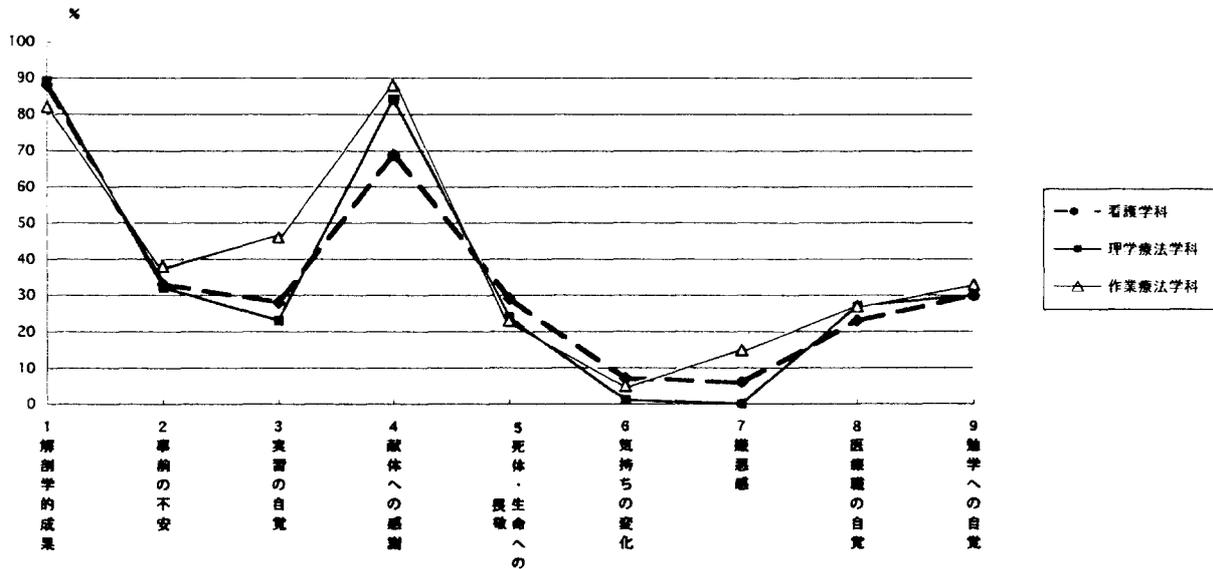


図1 看護学科と他学科との比較

血管の走行や仕組みから機能を推測する理論的な記載が多かった。作業療法学科の特徴としては筋肉に関心を持っていて、筋肉の衰えや筋肉の使い方による違い、年齢による筋肉の変化の記載であった。それぞれの領域の知識を反映させた解剖の学習をしていると言える。看護学科学生と理学／作業療法学科学生とは、解剖実習の時間数や学習内容の違いや見学する解剖遺体の状態も異なるため単純に比較は出来ない。しかし、看護学科の特徴を把握するためにあえて比較すると図1に見られる結果であった。看護学科学生が理学／作業療法学科学生との比較で有意に異なる点は、『献体への感謝』が理学／作業療法学科より有意に低い、『見学への自覚』は作業療法学科より有意に低い、『心理的嫌悪感』については作業療法学科より有意に低く、理学療法学科より有意に高い。

以上の結果から、看護学科の学生は理学／作業療法学科の学生と比較して献体への感謝、見学への自覚が低いと言える。

考 察

解剖遺体見学実習後の感想文を分析した結果、学生は三次元的感覚を使った学習によって解剖学的理解をより確実なものにできていることが判った。また、看

護学科の学生の特徴としては、臓器を外観や人体全体から生活体としてみるという「看護の視点からの学び」と、「不安や嫌悪感から、感謝・知的好奇心への心情の変化」がみられた。この結果を今後看護教育へどうかすかについて考察する。

1. 解剖遺体見学実習による学習内容

看護学科学生の見学実習は、観察対象が内臓を主としたものであること、カリキュラムや時間的制約の中での実習であることなどから、解剖学的成果としての学びには不十分さがある。しかし、実際に人体に接しての三次元的な学習は、からだの仕組みや構造、位置関係についての理解を促し、驚きや感動を伴った確実な理解をしていた。更に、その体験を通して生命のすばらしさや不思議さも実感できる貴重な学習体験であることが示された。

一方、看護学科の学生は正確な解剖学的用語を使用していないが3分の1を占めていた。感想文はレポートやアンケート調査とは異なり、知識の確認ができていく。しかし、看護教員の専門用語の使用の仕方が一因になっている可能性がある。実習が、例えば4時間と短時間であっても、看護教員の関わり方によっては、看護学の学習に解剖学の知識を反映させることができると考える。

また、看護学科学生には心臓・血管・肺などの生命を司る臓器の記載が特徴として現れている。理学療法学科学生は関節の動きに注目した運動に関心があり、作業療法学科学生は同じように関節に注目しているが筋肉の使われ方に関心があると考えられた。このことは、大谷¹²⁾、奈良¹³⁾、乗安¹⁴⁾が、「医療技術者養成機関において人体の構造と機能の学習は必須であるが、その重要性和強調される部分が異なっている」と報告している通りである。看護学科の学生は、これまでに学んだ専門領域の知識を活用し、看護という視点を持って解剖遺体見学実習に臨んでいることが推察できる。

「生命を司る臓器」への着目は、看護が生命力に注目していることと関連があり、生命臓器のしくみと構造理解は、患者の生命徴候の観察や生命のメカニズムの基礎知識として重要である。

次に、看護学科学生の38%が記載していた、臓器の外観や人体を全体から生活体としてみている「看護の視点」からの学びについて考察を加える。

「性差や年齢差」の理解は、看護の対象は、人間の“生から死”までの発達過程を対象としていることと関連する。男女の違いが形態や臓器の大きさに現れていること、年齢によって臓器が萎縮して小さくなっていることは発達特性の理解や対象理解を容易にする。「個体差」については、個人差は顔かたちや外観だけでなく、臓器の大きさや形・色の異なり、微妙な位置の違いにまで及ぶという理解は、患者の訴えや検査データ、現れる症状など対象の個別性の理解や、その人らしさを追求する基盤となる。「生活の歴史の現れ」、「疾患による臓器の変化」の学びは、生活のしかたや習慣がその人の健康や疾患と深く関わっていること、そして健康障害の種類や程度の判断、経過の推測の知識として役立つ。小林は「ご遺体は人体の構造を病歴や生前の生活習慣などと関連づけて調べることが可能な状態である。」¹⁵⁾と述べている。人間の生活の歴史が現れている人体、生活の証しとしての人体が内側から丸ごと観察できている理由として、看護学科では、解剖を見学する時期が胸部と腹部を開いた時期であり、理学/作業療法学科の四肢が外されている状態の時とは異なっていて、臓器を丸ごと学習できる状態であった。また、実習では50体の遺体を男女対で安置されていて、個体間での比較を通して学習できることであった。このことが「看護の視点」からの学習を促進している要因と考える。

他学科と同じ自由記載の感想文を用いて分析したことは、看護学科の特徴に着眼した把握ができ、看護教育にとって解剖遺体見学実習では何が学べるかを明確にできた。

看護の視点とは、看護とは何かという目的を持った見つけ方であると考えられる。看護とは何かについてはF.

ナイチンゲールの「看護とは、患者の生命力の消耗を最小にするように生活過程をととのえることを意味すべきである」¹⁶⁾が一般的に用いられている。看護の視点の定義については、薄井の「看護の光をあてて見る」こと、看護の立場からの視線で見る¹⁷⁾や金井の「自らの視点であり、なされた看護が看護であったかどうかを測るものさしである、看護の質を問うための共通の看護の独自性を示すものさしやバロメーター」と定義している¹⁸⁾。

現在、日本においては、①薄井の生活体として全体を見るという視点¹⁹⁾、②金井の生活過程を整える15の枠組み²⁰⁾、③菱沼の生活行動からの8つの枠組み²¹⁾、④内布らのQOLやwell-beingを測定する看護アセスメントの枠組み²²⁾、⑤今本らの外観からの生体観察³⁾などが報告されている。しかし、からだに現れている生活の歴史を内部から見るといふ報告は未だない。今回、看護学科の学生が、看護の知識を使い看護の視点から、解剖遺体見学実習に臨めば、臓器を外観から捉えられること、人体全体から生活体として捉えた学習が可能であることを実証していた。看護学にとっての解剖生理学的考え方の方向性を示唆していると考えられる。

2. 学生の心情の変化

見学実習前、或いは当日、恐怖や不安、嫌悪感を抱く学生が3分の2を占めていること。また、理学/作業療法学科学生より看護学科学生が感謝や学習への動機づけが低いことは今後の実習の進め方について一考を要する。

看護学科学生については、カリキュラムの解剖実習時間数、学科進度による見学時期や時間数、および見学するご遺体の状態によるものと考えられる。特に動物などによる解剖学的実習の経験をしていないこと、また、人の死に出会うことが殆どないままいきなり解剖遺体に出会うことなどが恐れ、緊張、ショックの原因になると考える。しかし、事前に受けたオリエンテーションや手記にあったご本人やご家族の思いや意志を知り、

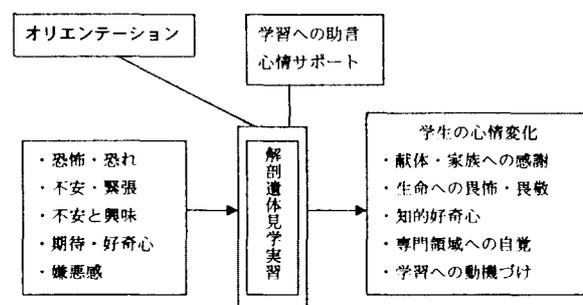


図2 解剖遺体見学実習感想文に見られる学生の心情変化

いつの間にか恐怖や緊張が薄れ、知的好奇心へと変化している。その変化は図2に示す。また、死や生命について考える機会となっている。学生の心情を知的好奇心に変化させた要因としては、見学当日のH大学医学部医学科解剖学第一講座教授や教官からのオリエンテーションが大きな意味を持つ。また、医学の発展を願って献体されたご本人とご家族の思いや意志が根底にあることが解剖遺体見学実習の大きな意義であると考えられる。学生は感謝、実習への姿勢というはっきりとした表現ではないが、全員が貴重な学習経験であったと記載している。

従って看護教員が事前のオリエンテーションを検討し、学生の心情を支援していけば解剖学の教科内容を高め、看護の専門領域で活用できる固有な知識習得へと発展させることができると考える。

3. 解剖遺体見学実習の意義と看護教育への今後のいかし方

解剖学の知識を活用した看護教育について、川原らは「食道の3つの生理的狭窄部は服薬時の確認や食事介助時の誤嚥及び経管栄養カテーテル挿入時の知識として活用できる。胸郭の骨格構造と内臓の位置は、肋骨の数え方や心電図・呼吸音・心音を聴取する時の知識として、頸動脈や上腕動脈の位置や触れ方は観察や血圧測定時の知識となる」と述べている²³⁾。小松らは看護実践の根拠として、解剖学の知識を活用した看護学の基礎データの研究論文を提示している²⁴⁾。

当看護学科における解剖遺体見学実習の意義を検討した結果、表4のように要約できる。

表4 看護学科における解剖遺体見学実習の意義

<p>1. 人体構造の理解</p> <p>1) 三次元的な人体構造理解：臓器の位置関係、仕組み、構造</p> <p>2) 感覚を通じての理解：目で見、手で触る、おさま</p> <p>3) 生活動作の解剖学的理解</p> <p>2. 「看護の視点」からの人体理解</p> <p>1) 一人一人異なる個体差</p> <p>2) 生活の現れとしての人体</p> <p>3) 性別・年齢による違い</p> <p>3. 哲学的、倫理的教育効果：命の尊さ、人体のすばらしさ 医療の発展を願った献体への気持ちや意志に応えたい</p> <p>4. 知的好奇心への変化： 怖さ・不安、ショックから知的好奇心へ</p> <p>5. 疾患による臓器の変化</p> <p>6. 更なる学習への動機づけ</p>
--

看護教員の立場から今後、見学実習を基礎看護学の教科内容にどのようにいかすか、また、学生の心情支援をどのようにするか2点について、以下の結論を得た。

1) 解剖遺体見学実習を看護教育に生かす学生への関わり方

①生活行動の枠組みから「からだ」を理解する。

関節の腱を動かしてどの筋肉や神経が動くか、筋肉の起始部による働きのメカニズム、使用による筋肉の形態の違いの理解は、動かす、食べて出すという看護の枠組みからの日常生活行動の基礎知識となる。また、生活のあり方からの考察が可能になるよう学びを拡げる。

②身体表面から内部を推測する。

体内臓器の大きさや形態、繋がりや位置関係のイメージ化や感触による学びは、更に臨床の場でのイメージ化にまで高める。

③生活のしかたや生活習慣が人体に影響することを理解する。

④人体が一人一人異なることを個別的な看護に活用する。

臓器が一人一人大きさや形、重量、位置が異なるという個体差という実感は、対象の訴えや現れている症状について個別性の理解と関連させる。併せて一人の人間としての尊厳やかけがえのない独自の人間としての尊重に想起させる。性差や年齢による違いの学びは、発達過程の理解に役立てる。

⑤疾患による臓器の変化は、病理理解や健康障害の判断に役立てる。

肺のようにやわらかい臓器、心臓や血管壁の厚さや弾力が異なる臓器の特徴理解は疾患によって起こる病態変化の判断や検査データの判断基準としてより確実な知識に活用できる。

2) 事前の講義などを通じて、解剖遺体見学実習時の学生の心情を支援し、看護の専門領域からの動機づけと知的好奇心へと変化させる。

授業の実践で重要なことは、学生の現在の興味や心情に依拠しつつも、更にその上位に目標を設定した働きかけを行えば、それを教科内容として習得することができる。学生はその新しい質に興味を持って転化させ、発展させていくことが可能になる。看護教員が解剖学的知識を活用した目標を設定し、具体的な教育内容や教育方法で教授＝学習活動を行えば、より高いレベルの教科内容の習得が可能になる。従って、この身体内部から生活の歴史が観察できる解剖遺体見学実習の意義は大きく、カリキュラムへの編成が必要である。

学習の機会を提供下さいましたH大学医学部医学科解剖学第一講座教授、教官に深謝する。

文 献

- 1) 菱沼典子. 生活行動から「からだ」をとらえる. 日本看護科学学会誌, 14 : 48-52, 1994
- 2) 薄井担子. ナースが視る人体. 東京, 講談社, 1987
- 3) 今本喜久子, 徳永祥子. 4年制看護教育における人体解剖生理学実習. 日本看護研究学会雑誌, 21 : 39-49, 1998
- 4) 島田達生. 看護大学の解剖学教育のあり方—解剖学実習の取り組み—. 日本看護研究学会雑誌, 20 : 245, 1997
- 5) 渡辺皓. 看護婦・看護師養成機関における解剖学教育の現状と問題点. 解剖学雑誌, 73 : 281-286, 1998
- 6) 大谷修. 医療技術者養成のための解剖学教育—医学科解剖学教室の立場から—. 解剖学雑誌, 73 : 293-294, 1998
- 7) 小林邦彦. 医療技術者養成における人体解剖実習の重要性とその条件整備への提言. 解剖学雑誌, 73 : 277-278, 1998
- 8) 外崎昭, 小林邦彦ほか. 医療技術者養成機関における人体関連教育(解剖学)に関する実態調査. 解剖学雑誌, 72 : 477, 1997
- 9) 今本喜久子, 徳永祥子. 4年制看護教育における人体解剖生理学実習. 日本看護研究学会雑誌, 21 : 42, 1998
- 10) 竹中和子, 山中道代ほか. 看護学生における解剖見学実習前後の「死体」に対するイメージ変化. 広島県立保健福祉短期大学紀要, 1 : 43-50, 1995
- 11) 川喜多二郎. 発想法. 東京, 中央公論社. 1989
- 12) 大谷修. 医療技術者養成のための解剖学教育—医学科解剖学教室の立場から—. 解剖学雑誌, 73 : 294, 1998
- 13) 奈良勲, 川真田聖一ほか. 理学療法教育機関における解剖学教育の現状と将来像. 解剖誌, 72(4) : 265, 1997
- 14) 乗安整而. 理学・作業療法学科に求められる解剖学. 解剖誌, 72(4) : 265, 1997
- 15) 小林邦彦. 医療技術者養成における人体解剖実習の重要性とその条件整備への提言. 解剖学雑誌, 73 : 277-278, 1998
- 16) F. ナイチンゲール. 看護覚え書き. 2-3. 東京, 現代社, 1991
- 17) 薄井担子. 科学的看護論. 東京, 日本看護協会出版会, 72, 1991
- 18) 金井一薫. ナイチンゲール看護論・入門. 東京, 現代社. 20-21, 1993
- 19) 薄井担子. ナースが視る人体. 東京, 講談社, 1, 1987
- 20) 金井一薫. ケアの原形論. 東京, 現代社. 66-67, 1998
- 21) 菱沼典子. 生活行動から「からだ」をとらえる. 日本看護科学学会誌, 14 : 48-52, 1994
- 22) 内布敦子, パトリシア. J. ラーソン編. 実践基礎看護学. 東京, 建帛社. 3-7, 1999
- 23) 川原礼子, 渡辺皓. 図解人体構造学. 東京, 看護の科学社. 7, 1997
- 24) 小松浩子, 菱沼典子. 看護実践の根拠を問う. 東京, 南江堂, 1998

The significance of practical observation of the dissected cadavers in nursing course — Analysis of students' descriptions after their studies —

Akemi FURUYASHIKI*¹, Noriko TAMURA*¹, Reiko ISHINO*¹,
Mie TSUCHIYA*¹, Hanako SHIOKAWA*¹, Isuzu OTANI*¹,
Kazuhiko OKITA*², Hideki MIYAGUCHI*³ and Tokio DOMOTO*¹

- *1 Department of Nursing, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare
- *2 Department of Physical Therapy, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare
- *3 Department of Occupational Therapy, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

Abstract

Comments, thoughts and feelings expressed by nursing students after their observation of dissected cadavers during a college course of anatomy were analyzed to determine the role of this experience in nursing education. The written comments of the nursing students were compared with those of the students of physical and occupational therapies. Most students including the nursing majors evaluated this experience as an opportunity to better understanding of anatomy and to ponder on the issues of life and death and body-donation. Comparative content analysis of the comments identified distinguishable characteristics in the nursing students' responses. They tended to observe the organs and bodies from the viewpoint of nursing, and to make efforts to overcome their initial feelings of anxiety and disgust. They were more attentive than students of other disciplines to individual differences of those persons who had donated their cadavers in terms of life history, gender, age and the type of the disease they had suffered from. We conclude that it is important for instructors in nursing education to design a nursing curriculum in congruence with this experience of cadavers study and to support the students' emotional developments.

Key words : observation of dissected cadavers, students' descriptions, emotional development, viewpoint of nursing